

# 小室さん文書は「秋篠宮さまへのアリバイ」？ 皇室に関わる人間の振る舞いとして違和感

吉崎洋夫 2021.4.9 [dot.#小室圭さん#河西秀哉#皇室#眞子さま#結婚#象徴天皇制#金銭トラブル](#)

秋篠宮ご夫妻の長女・眞子さまとの婚約が内定している小室圭さん 8 日、文書を発表した。母親と元婚約者の男性との間にあるとされる「金銭トラブル」について説明。計 28 ページの長い文書だが、これをどのように読み解けばいいのか。象徴天皇制に詳しい👤**河西秀哉**名古屋大准教授(歴史学)に聞いた。

読んだ印象は、丁寧に説明されたとは思いますが、正直、読むのに一苦労しました。全部読む人はほとんどいないのではないのでしょうか。読みにくくなっている理由は、過程を説明しようとして細かく書くことで、わかりにくくなっているからでしょう。

また、👤**自分の主張を繰り返すことに固執している印象**です。国民に向けてわかりやすく説明しようとしている文書とは到底思えません。

では、👤**誰に向けて書いたか**というと、秋篠宮さまではないでしょうか。秋篠宮さまは今年の誕生日で、「多くの方が納得し喜んでくれる状況の前提として、今までもあった問題をクリア(するために)相応の対応をする必要がある」「やはりそれが見える形になるというのは必要なことではないか」と述べていました。そういった意味では、👤**結婚に向けて「やることはやった」と示す、アリバイづくりの印象**があります。

本来であれば、文書だけで終わらせるのではなく、会見を開いて国民に説明するという機会を設けたほうがよかったと思います。ただコロナ禍ですので、オンラインでも構いませんが、記者からの質問を受けて、それに答えるべきでした。👤**このままでは国民の理解は得られないでしょう。**

**今回の文書公表でみせた!!小室さんの姿勢は、平成の天皇が追求した皇室のあり方、皇室のあるべき振舞いとまったく違うものになってしまっています。**平成の天皇は積極的に国民の前に姿を現して、その取り組みを国民に理解してもらい、認めてもらうようと努めていました。小室さんが記者会見を開き、最後まで質問に答える姿勢をみせれば、平成の天皇が追い求めた皇室の姿と通じるところがあったでしょう。そういう姿勢を示せば、世間の受け止めも良くなったのではないのでしょうか。

ただ、残念ながら発表した文書は、平成の天皇が追求した皇室のあり方とは異なるものになっていました。小室さん側が 2019 年 1 月に公表した文書について、**「金銭問題に関することは『解決済みである』と主張していると誤解されている方がいらっしゃいますが、それは誤解です」と記していましたが、👤**自分は悪くない、誤解したり文書を読み誤ったりした報道や国民のほうに責任があるというように読めます。****文面からは、!!名誉を傷つけられたので法的手段に訴えたいと言いつつような雰囲気さえ感じます。確かに報道が過熱した面もあり、小室さんの心情は理解できるところはありますが、それでも👤**皇室に関わる可能性がある人間の振る舞いとしては、違和感を覚えます。**

宮内庁の西村泰彦長官が定例記者会見で、今回の小室さんの文書について「非常に丁寧に説明されている印象」、「小室さん側と元婚約者との間の話し合いの経緯についても理解ができた」などと話しました。私は、宮内庁と小室さん側が事前にすり合わせをしたようにも感じました。宮内庁側としては、これで「問題は解決した」とする可能性はゼロではありません。

眞子さまと小室圭さんが結婚を強行したら、象徴天皇制や皇室に対する国民の信頼が失われかねません。眞子さまの結婚一時金として1億5千万円が支払われると見られていますが、!!このままでは「税金を無駄に使っている」という批判が出てくるでしょう。眞子さまだけではなく、皇室全体への批判も出てくるかもしれません。

そうならないためには、小室さんは今からでも記者会見をして、国民の前で説明するべきでしょう。説明が遅れたことに対して、細かい理屈を並べて自らの正当性を主張するのではなく、「自分としてはこういう思いもあって、遅れてしまった」などとお詫びの気持ちを率直に伝えてはどうでしょうか。「借金の認識について判断がつきかねます」とハッキリいったらどうでしょう。

文書の最後は「おわりに」として「この文書をお読みいただくことによって、これまでの事情を理解してくださる方が1人でもいらっしゃいましたら幸いです」と小室さんの希望を記していますが、肝心の本文からはその気持ちが伝わりませんし、理解できる内容でもありません。国民に向けてもう一度メッセージを出すべきだと思います。

(まとめ／AERAdot. 編集部・吉崎洋夫)

\*\*\*\*\*

## 小室圭さん文書に「強いプライド」が見えた理由 香山リカ「怒りの怪物に

ならないか心配」 2021/4/9 07:00 dot. 小室圭さん(c)朝日新聞社

8日、秋篠宮家の長女・眞子様との婚約が内定している小室圭さんが、文書を公表した。母親と元婚約者の間にあったとされる「金銭トラブル」について説明する内容で、字数にして6万字以上にも及ぶ「長さ」も話題を呼んでいるが、文書にはどのような意図が込められているのか。**精神科医の香山リカ氏**に見解を聞いた。

\* \* \*

文書は概要も合わせると28ページ。6万字を超える膨大な内容だ。書面に目を通した香山氏は、次のように所感を語る。

「アメリカで一生懸命法律を勉強されて、得てきた知識を駆使しているのですが、文章からは肩に力が入っている感じがします。これで『論理的に説明したつもり』になっているのだと思いますが、👉文面の裏には『強い感情』も透けて見えますね」

それはどんな感情なのか。香山さんは続ける。

「文書には『👉悔しさ』や侮辱されたことに対する『悲しみ』、『怒りに基づく執念』などがにじんでいるように思えます。これまでの報道についても「目を伏せる」のではなく、きちんと目を通しているのだということが分かります。これで結婚がうまくいかなかったら、『怒りの怪物』のようになってしまわないか心配です」

香山さんが注目したのは、「◆**名誉**という言葉」。例えば、金銭トラブルについては「切実に名誉の問題でもありましたし、今でも同じように受け止めています」という表現で自身の見解を述べている。この部分だけでなく、「名誉」という言葉は、文書の複数カ所で見受けられた。これについて、香山さんは小室さんの「自尊心」の表れだとみている。

「文書では何度も『名誉』という言葉が出てきますが、とにかく自分が低く見られたり、軽く見られたりすることはしたくないというプライドのようなものが表れていると思います。小室さんはこの数年、世間からさまざまなバッシングを受け、苦勞して過ごしてきたはず。今回の長文の書面を公表した背景には、『世間を見返す』というまではいかないにしても、◆**社会や世間の評判に対する自分なりの反発心**のようなものがあつたのではないのでしょうか」

また、次のようにも指摘する。

「眞子さまとの『結婚』を最優先にするのであれば、早期にお金を返すなどして母親の元婚約者と和解に進んだ方がいいはず。でも、それ以上に、◆**譲れない事柄があつたのだ**と思います。おそらく、👉母子家庭であることや父親の死に関する報道によって、社会から偏見の目で見られていると感じたのでしょう」

とはいえ、一般の国民にこの文書はどのように映つたのだろう。SNS などでは、「かわいそう」といった同情の声はあるものの、「メンタル強すぎ」「自分の正統性を主張しているだけ」「長すぎる」など批判的な意見が多くを占める。小室さんの「思い」はなぜ、受け入れられないのか。

「多くの国民は、◆**皇室の人と結婚する人に対しては、『協調性』や『穏やかさ』を望ん**でいますが、この書面からは!!自分の名誉を守りたいという、非常に強い“!!個人の核”が感じられます。世の中が内親王の結婚相手として期待する人物像とはズレがあります。なにより、この文面では、👉**眞子さまとの結婚よりも自分たちの『名誉回復』に重きを置かれているように**読めてしまいます」 当然、それは国民からすると受け入れがたく、結果的に今回の文書は ◆**言い訳**のように映ってしまっているのだろう。

「世間に良い印象は持たれないでしょうし、本人の意図とは違う形でとらえられてしまう。世間に訴えるのなら、こうした論理的な試みよりも、『どうしても眞子さまと結婚したいのだ』という、『情』に訴える方がいいのではないのでしょうか。プライドを優先させれば、国民から祝福されるような結婚からはどんどん遠のいてしまいます」(香山氏)

小室さんがこうした文書を出したことについて、眞子さまは何を思うのだろうか。香山氏は「おそらく目を通して  
いるでしょう」とした上で、眞子さまのお気持ちをこう推察する。

「眞子さまが結婚だけを優先させるのであれば、穏便にお金を返して穏便に和解に向かわせるはず。この文書  
に目を通して引き止めなかったのだとすれば、きっと👉眞子さまも小室さんの自尊心を大事にしているのでしょ  
う。はっきり自分を持っているところに、惹かれたり、期待したりする部分もあるだと思います」

2人はオンラインで密に連絡を取っていると思われる。「そうだとすれば、この文面には◆眞子さまのフラスト  
レーションも入っているのかもしれないですね。👉自分を取りまく状況や環境に、不満があるのではないでしょ  
うか。◆紀子さまは皇室に過剰といえるほど適応した方です。そして皇室の理想の一家を作ろうとお努めになられ  
た。子どもたちにもご自身が思う皇室のあり方を強く望み、厳しく接してきた側面があるのかもしれない。👉今  
回の騒動は、小室さん自身の問題という小さな話にとどめたくはありません。👉皇室問題や家族観など、この  
国における普遍的な問題が絡んでいる。日本のひずみを象徴するものだと思っています」

\*\*\*\*\*

## 小室圭さん文書に対する「👉強烈な違和感」…宮内庁長 官は“大絶賛”で本当にいいのか

安積 明子

「世界終末時計」をご存知だろうか。

核による人類滅亡を午前0時とし、それまでの時間を象徴的に記した仮想の時計で、1947年からアメリカの  
「原子力科学者会報」が表紙に用いているものだ。ソ連が崩壊した1991年には「17分前」まで戻ったが、  
2020年と2021年は「人類滅亡まで100秒」とまさにカウントダウン状態。核問題や気候変動問題への対策  
が進んでいないことに加え、新型コロナウイルス感染症の歴史的蔓延が原因だ。もし「皇室終末時計」というの  
があるとしたら、その針は4月8日のお昼ごろ、「👉午前0時」に向けて大きく振れたに違いない。原因は秋篠  
宮家の長女・眞子内親王の“婚約内定者”である小室圭さんが公表した28枚にわたる「金銭問題説明文  
書」の公表だ。

### “何か”に迫られて書いた文書

眞子内親王と小室さんが婚約内定会見を開いたのは今から3年7ヵ月前の2017年9月3日のことだっ  
た。当初は2018年3月4日に納采の儀を行い、同年11月4日に帝国ホテルで挙式の予定だったが、  
2018年2月6日には「十分な時間をとって準備を行うのが適切であるとの判断に至り」（眞子内親王の文  
書）という理由で、御代替わりの一連の儀式が終わる2020年まで延期することが発表された。

だが結婚延期の👉本当の理由は、2017年12月12日に週刊女性が小室さんの母・佳代さんの“借金問題”を報じたことだった。そしてこれをきっかけとして、各週刊誌は競って小室さんの「知られたくない事実」を書き立てるようになったのだ。そうした喧噪から逃げるように小室さんは2018年8月7日に渡米。フォーダム大学ロースクールに入学し、2019年1月22日に「金銭問題解決済み文書」を出しただけで沈黙を貫いた。しかし留学期間も終わりに近づき、勉学を名目に問題を放置しておくことができなくなったのだろう。また2020年11月13日に👉眞子内親王が「なりふり構わないお気持ち文書」を出したことも大きく影響したに違いない。

それゆえなのか、「金銭問題説明文書」の文面は“!!何か”に迫られて書いたという印象が強い。さらに目立つのは👉読みにくさと👉論理矛盾と👉自己中心だ。眞子内親王との結婚の意思が非常に強いことが伺えるが、同時にそのことを批判除けにしているようにも思われる。

加えて「借金ではなかったものが借金であったことにされてしまう事態を受け入れることはできないと考えた」「一般的には金銭トラブルと呼ばれていますが、切実に👉名誉の問題でもあります」など、プライドの高さも際立っている。

それにしても、何よりも名誉を重んじる小室さんに、相談した複数の弁護士がなぜ適切なアドバイスをしていないのか。彼らは小室さんに「反応すべきではなく、何もしない方がいい」と述べたというが、「👉何も払わない」ことを優先するのなら、借用書などがなければ何もしない方が得策に違いない。

しかし一般人とはいえない小室さんのような立場では、👉沈黙が逆効果になることは火を見るより明らかだ。

## 「借金」か、「贈与」か

ややこしいのは小室さんが👉「借金」であることを否定しながら、「贈与」とも主張していない点だ。

もっとも2013年8月に元婚約者に対して「贈与であるから返済の気持ちはない」と伝えたものの、その後には👉貸付と贈与の両方が存在することを確認し、👉一方的に破談を申し出た元婚約者に対する佳代さんの👉損害賠償請求権でもって債務を相殺するという“荒業”に至ったと説明する。

ゆえに2019年の「金銭問題解決済み文書」では「支援や慰謝料の点を含めて金銭的な問題はすべて解決済みであることを二人（注：佳代さんと元婚約者）は確認したのです」と主張することになるのだが、今回の「金銭問題説明文書」ではなぜか「母は、元婚約者の方の『返してもらうつもりはなかった』との言葉を受けて、👉婚約破棄に関する権利を放棄したと考えられます。この元婚約者の方の言葉と母の対応によって、たとえ元婚約者の方が金銭の返還を請求する権利を持っていたとしても、それは母の権利（損害賠償請求権）と共に清算されたことになり、母が元婚約者の方への金銭を返還する義務はなくなったと解することができます」とまるで一般的な法律構成のように説明している。👉現実に存在する事実を述べるなら、「考えられる」「解することができる」などと言うはずがない。

矛盾点はまだある。「贈与ではない」と主張するのなら、週刊新潮 2018 年 4 月 12 日号が報じた記事についてはどう説明するのか。

同号は秋篠宮家の事情を知る関係者の話として、金銭問題が報じられた後に秋篠宮家が佳代さん呼び出し、解決をするように何度も伝えたが、佳代さんは「私たちはあくまで贈与を受けたという認識で、これに変わりはありません」ととりつくしまなかったと報道。佳代さんが**(皇室に)借金を申し込んだ**ことも暴露している。「『でも、どうしてもお返しした方がいいと仰るのであれば、皇室の方でお金を用立てていただくことはできませんか』と(佳代さんが)言い出したのです」

## 宮内庁長官は“大絶賛”したが…

この件について週刊新潮は宮内庁関係者のコメントもとっており、宮内庁にも伝えられたことは間違いないが、その宮内庁のトップを務める西村泰彦長官は、4 月 8 日に公表された小室さんの「金銭問題説明文書」について、「非常に丁寧に説明されている印象だ」「小室さん側と元婚約者との間の話し合いの経緯についても理解ができた」と“大絶賛”した。

西村長官は昨年 11 月の秋篠宮文仁親王の「憔悴会見」の後に小室さん側の代理人弁護士と接触し、定例会見で小室さん側に説明を求めていた。よって小室さんが文書を出したことで一応は“任務”を終えたと考えたのかもしれないが、果たしてそうだろうか。

**宮内庁長官の第一の職務は皇位継承の安定と皇室の存続に尽くすことだが、それには国民が皇室に対して敬愛の情を抱くことが不可欠だ。国民が理解し、眞子内親王と小室さんとの結婚を祝福するような環境にない限り、西村長官はその職務を全うしたとは言えないだろう。**

8 日夕方、官邸では安定的な皇位継承策などを検討する有識者会議が開かれ、5 名の専門家に対して女性宮家の創設や女系天皇の是非など 10 項目にわたって意見聴取が行われた。男系の女性天皇については賛否が分かれ、女系天皇については慎重な意見が目立ったというが、いずれにしても皇室なくして日本はなく、国民の支持がなくては皇室は存続しえない。

にもかかわらず、👁️つまらないスキャンダルで皇室終末時計の針が大きく「午前 0 時」に振り切るとしたら、それは“!!我々の日本”が存亡の危機に瀕していることに他ならない。